
三次元に恋をした

夢月 那由紀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三次元に恋をした

【Nコード】

N7482G

【作者名】

夢月 那由紀

【あらすじ】

以前告白し、フラれた夢乃はそれ以来、恋愛が怖くて恋をしなかった。それからは、マンガのキャラに恋をして、ヲタクになってしまふ。しかし、夢乃は中学校二年生で現実の世界の人間に再び恋をする。

1話：青春とは何か

『青春』とはなにか、と中学一年の時、クラス交流で聞かれた覚えがある。

その時の答えを私は何故か、鮮明に覚えている。

「青春ねえ…恋愛して、楽しい学校生活を送ること、かな？」

それを今、思うと私は今、青春しているんだな…と思う。

彼と初めて会ったのは、小学校二年生の冬になる少し前だった。

その頃はまだ子供で『恋愛』なんて、興味がなくて、第一印象すら覚えていない。

それから気付けば小学校を卒業していて、中学校に入学。

新しい友達も数人できて、私は『ヲタク』というものになっていた。これは確実に友達の影響だとは気付いていたけど、止める気にもなれなくて。

どんどんエスカレートしていった結果、マンガのキャラを好きになるまで依存していた。

だけど、二年生になる時のクラス替えで、何人かのヲタク友達クラスは離れてしまい、同じクラスになった奴で、一番印象に残っているのは、向かいの家に住んでいる——沢本優斗さわもとゆうとだった。

初めは何の興味もなくて、マンガのキャラのことばかり考えて、ずっと依存していた。

そんなある日、四回目くらいの席替えで私と彼——優斗は隣になった。

互いの弟同士が同じ部活動で仲が良く、母親たちも仲が良くて。その為か、私と優斗も色々と話すようになって、私にとっては、ただのクラスメイトの男子ではなくなっていた。

ヲタク友達の他にも、彼氏のいるヲタクではない友達もいて、その

子——さきとみらい 崎本美来に聞けば。

「それは優斗を好きになりかけているね」
そう、言われた。

2話・恋なんてもうしない筈だった（前書き）

『三次元』という言葉は現実の世界、という意味です。

2話：恋なんてもうしない筈だった

もう恋なんてしない、小学校六年生の時そう決めた。

恋なんて、いいところ無しの私にとっては身の程知らずのことだったのかもしれない。

学年で一番、人気のある人が私なんか好きになる筈ない。

そうと知りつつも告白して、返事は返ってこず、半年が過ぎた。

それから私はやけくそになって、全てを諦めた。

何にも期待などしない。

信頼できるのは、たった四人の親友だけ。

「好きになりかけている、って…」

私には想像がつかなかった。

顔が真っ赤になるくらい、話なんて出来なくなるような、そんな状態がその人を好きだ、って証明するものだと思っていたから。

だけど…

「それは誰にもバレたくないから、表面上で装っているだけだと思うよ？」

そんな風に言われ、よくよくじっくり考えてみると、恥ずかしくなるくらい、顔が火照った。

そんなこと急に言われたって、私はヲタクであること…

マンガのキャラを好きでい続けたかった。

だって自分自身が一番、驚いている。

いつかはヲタクなんて、止めなきゃ、って思っていた。

でも、せめて中学卒業するまではヲタクなんだろうな、って。

そう、思っていた筈なのに…

「でも、どうするかは夢乃の自由。キャラを好きでい続けるか、優斗を本気で好きになるか」

本気で、なんて言われて少し、自信を持つことができなかった。

本当に好きだった、って思うと、紙面上にいる彼しか思い浮かばなかった。

でも、ヲタクを止める機会にはちょうど良かった。

友達には何て言ったらいいか分からないけれど、でも強制されるものじゃない。

そう考えた私は決心して、依存していた自分を棄てたの。

優斗に、嫌われたくはなかったから。

ヲタクだってバカにされて、嫌われたくはなかったから。

だって、初めてマジで三次元に恋をしたんだよ？

3 話：彼の好きなところ

特別、優斗に輝く場所がある訳でも、何でもなかった。

宿題はやってこないで他人^{ヒト}のを写すし、消しゴムは無いって毎日のように他人^{ヒト}のを使う。

でもそれが、私と優斗が話をするきっかけ。

他のクラスメイトの男子より仲良くなった優斗と斜め後ろの席の前^ま田連^{えだれん}と話しながら、そう、思っていた。

もっと具体的に言えば私は話しているというより、いじられているだけなんだろうけど、

不思議とそれが嫌とは思えず、逆に何だか嬉しくて、このままこの席でいられたらいいな、なんて思っていた。

私にとって優斗は好きな人で、でも幼馴染ではなくて、でもただのクラスメイトと呼ぶには何か軽い。

でも、告白しようなんて考えは私にはない。

もう、あんな思いはしたくない。

この関係を崩したくない。

普通に話せる今が幸せ。

告白して、話せなくなるなんてことは絶対に嫌。

見ているだけでいいの、他愛のない話ができるだけでいいの、いじられているだけでいいの。

それが私の幸せだから。

六年生の時みたいに女子と仲がいいような人でもないし、辛い思いをすることもない。

逃げているのは分かっている、だって私は臆病者だもの。

現実から逃げたかったから、私はヲタクになったのだもの。

話すことも、会うことも出来ないけれど、でもだからこそ、逃げ道としては最高だった。

私は逃げて逃げて、自分が傷つかないような道を選んできた最低の人間だもの。

「はさみ、貸してくれ」

授業中、ボオ…っとしていた私に優斗が小声で言った。

私がボオ…としていたのもあるけれど、先生の声でよく言葉が聞き取れなかった。

それでも私はいつも彼に授業中貸すものといえば…と考え、のりを手渡した。

「のりじゃなくてはさみ、何やってんの？お前」

また、いつものようにバカにされ、笑い飛ばされた。

恥ずかしいけれど、あの意地悪な私の好きな彼が見れた。

自分が十分バカだって分かっている。

完全に彼が好きだって、もう言える。

4話：恋ってね…

冬休み明け、優斗と連が真つ先に私に言った言葉は。

「お前、休み中に30キロぐらい太っただろ？」

さすがに、朝登校する前に鏡を見たら、顔が丸くなっているな、とは思ったけれど、30キロは失礼じゃない？

それともこの二人は私なら、傷つかないとも思っている訳？

あまりにデリカシーのない言葉に心が傷ついた。

これがどうでもいい男子なら、一発殴っているところだけど、好きな人に言われてしまつては、何だか悲しかった。

悔しいのと悲しいのが入り混じつた私は友達に話す気にもなれなくて、ただ机に突つ伏していた。

「うう…」

「どうしたの？」

話しかけてきたのはクラスで一番仲のいい、石田里美いしださとみだった。

恋愛相談は主に彼氏のいる美来で、ヲタクで恋をしたことのなかった里美にはほとんど何も言わなかった。

好きな人ができた、って伝えただけで。

「何？何か悩んでいるなら、相談してよ」

相談できるような話じゃないし、里美には分からないと思う。

「じゃあさ、もしお前太ったな、って言われたらどうする？」

「どうするって…あんまり、気にしないからね、あたし。思春期なんだからさ」

やっぱり駄目だった、というのが本音で。

やっぱり、里美には恋愛相談なんて出来ないし、するべきじゃない。

こんなに悩んだのは、いつ以来だろう。

最近まで、悩むことなんて、ほとんどなかったのに。

ダイエットするって決心できたのは何故だろう。

やっぱり、考えが行き着くのは優斗が好きだからってところだった。好きになってももらえなくても、嫌いにはなってほしくないから、だから、ヲタクも止めることができたし、ダイエットをする決心もついた。

恋ってね、人を変えられるんだよ。

その人の為に、いっぱい努力出来るんだよ。

だから恋って素敵なの。

5話：きゅうつ…と痛む嫌なモノ

冬休み明けに行われるのは、『席替え』

私にとつては今、一番嫌なこと。

でも、里美にとつては隣が変わる機会チャンスだった。

特別、里美にはこの人と隣になりたいっていうのはなかった。

でも私は、隣の席以外に優斗と仲良くなれるきっかけはないんだよ。だって、臆病者だから。

それ以上に仲良くなる術はないんだよ。

私が努力すればいいんだろうけど、周りに私が優斗を好きだってバレたくない。

やたらに私が優斗に話しかけてしまったら、バレてしまうでしょう？

「はい、じゃあ移動」

全員がくじを引き終わって、黒板に書いた自分の場所に移動し始める。

黒板には私と優斗の微妙な位置が表されている。

それに優斗の斜め後ろの席には『里美』っていう名前が書いてあった。

私の親友、里美の名前。

羨ましいとも思ったし、里美と優斗が話している姿を見たことがなかったから、大丈夫だろうって思っていた。

でも、それは私が見ていなかっただけで、里美と優斗が話すきっかけは私なんかより、たくさんあったんだ。

授業前、チラッと優斗の方を見れば、里美と楽しそうに話している。何を話しているか、私の席からは分からない。

ただ私の中にモヤモヤしたものが溜まっていく。

気持ち悪くて、胸がきゅうつ…と痛む、嫌なモノ。

その時、私は美来の言葉を思い出した。

『見てるだけでいいって言っていても、そのうち欲が出てくるんだって』

この嫌な感じも、きつと欲が出てきているからなんだ。

これは…里美に、嫉妬しているんだろうな、って。

嫉妬って見えないし、里美には絶対に言えない。

だって、言っちゃったら、里美との関係が悪くなる。

6話：『夢乃』ティッシュの方程式

冬休み明けのただただ平凡な日常は、私の幸せであり、悲しみであり、孤独だった。

優斗を遠目から見ていてだけでいい、って美来に言った。けどそれは日に日に変わっていった。

優斗を見ているだけが私の幸せだった筈なのに、私以外の女子と…里美と楽しそうに話している姿を見るのは辛かった。

その姿を見る度に、悲しい気持ちや嫉妬で私の心の中が溢れていた。そして、そんな自分がここにいるのを確認する度、醜い女だと思った。

「きしくら岸倉」

ふと、優斗に呼ばれて、声のした方を向いた。

彼は私がこんなに悩んでいるなんて、思っていないだろうな。そう思う度、胸が、心が痛かった。

「な、何？」

「ティッシュ」

ブチッと切られた単語。

普通なら、こんなんじゃ分かる筈もない。

だけど、私はクラスでは『夢乃』ティッシュ』という方程式が成り立っていた。

給食時間や美術の時間にクラスメイトがティッシュを貰いに来ることなんて、珍しいことじゃなかった。

優斗もティッシュを貰いに来る一人。

「はい」

初めは自分で持ってきたよ、って呆れて言っていた。

でも今は、こんなことすら嬉しいと思えるんだ。

だから逆に今は優斗だけは持っていてこなくていいよ、って。

忘れたとき、必ず私の所に来る、なんて保障はないけれど。

でも『夢乃』ティッシュ』の方程式がある限り、可能性は低くはないから。

それでも、表面上は冷静を装って、優斗を好きだなんて誰にも気付かれないように。

もうあんな思いはしたくない。

毎日毎日思ってる。

優斗には嫌われたくない、って。

何度も、何度も。

7話：そんな権利は私にはない

小学生の時、好きな人がほぼ学年中にバレて、よく冷やかされた。それ以来自分は顔に出やすいタイプだって気が付いたから今回は表面上は冷静を装おうと思ったんだ。

「はあ…」

今日も優斗と里美が楽しそうに話す姿を直視してしまった。自分が嫉妬していると気付いてからもう結構経つ。

「何、溜息ついてんだ？」

バカにしそうな雰囲気^{レン}で連が話し掛けてきた。

「別に」

今は誰とも話したい気分じゃないの。

だから放っておいて。

私は独りが好きなの、誰かとつるむとかそういうのには向いてないの。

「溜息ついていたら幸せ逃げるぞ」

何を…連は私の幸せなんてどうでもいいくせに。

連はそんな優しい奴じゃない、私が言えることじゃないけれど。

私だって、性格悪いし。

あ、また笑った。

あの意地悪そうな顔を見るのは好き。

でも、他の女子に…特に私と仲の良い人に向けているものだと、すごく辛い。

嫉妬は醜^{ウツクシ}いって分かっているけど…

「それは嫉妬くらいするでしょ？」

彼氏のいる、美来に相談するとこんな答えが返ってきた。

「美来だって嫉妬くらいするよ？美来以外に笑顔を向けないで、っ

て思うもん」

それは彼女だから許される特権で、私は別に彼女じゃないからそんな権利は持っていない。

彼女じゃないし、幼馴染でもない、でもただのクラスメイトとは違う。

彼女じゃないのに嫉妬しちゃう。

そんなのはよくないって、自分勝手だって、分かってる。

気持ち伝えていない臆病者。

8話：自己満足の解決（前書き）

これからの話は暗い場面が多くなっていくと思います。

8話：自己満足の解決

「はあ……」

一日一回は里美と優斗の話している姿を見てしまつて、溜息を吐いている。

見たくない、でも里美との仲は悪くしたくない。

里美には私が優斗を好きだって、言ったのに多分、私が今、こんな気持ちだなんて知らないんだろう。

里美はそういうことに関してはかなり、鈍感だ。

「はあ、嫌だなあ……」

「何が嫌なんだよ？」

急に話し掛けられて、内心ビクリツとした。

優斗は私が今どんな気持ちか、なんて知る訳ない。

だから普通に話し掛けられると、胸が苦しくて、辛かった。

「別に」

「そうかよ」

「何か用？」

いつも通り、平常心を装うことも出来ず、ツンケンとした態度をとつてしまった。

「ティッシュ」

また、だ。

私は便利な道具じゃない。

私の存在価値って何？

私はただ、ティッシュを皆にあげるために学校にいる訳じゃないんだよ？

「もぉ…嫌だぁ…」

泣き出しそうになるくらい、辛くて胸が痛む。

里美への嫉妬と、私の存在価値の虚しさ。

「夢乃、どうしたの？」

「分からねえ、いきなり泣き出して」

優斗の隣には、里美。

私が優斗と一緒にいるよりも里美といった方が優斗も楽しんでた。私なんかがいて良い場所じゃない。

私は独り、教室を飛び出した。

優斗に話し掛けられた時は、凄く、凄く、嬉しかった。

ドキドキしていても、顔だけは赤くならないよう平常心を装って、好きだって気付かれないようにしていた。

でも今は…そんなことすら出来なくて、ただただ辛かった。

優斗を見れば里美もいる。

優斗を見ることが、苦だった。

でもきつと、今日が終われば…明日になれば元の私として装うことが出来る。

そんな気がしたから、二人の前を逃げてきたの。

勝手に嫉妬しているのは私、勝手に苦しんでいるのも私。

どっちも勝手で、どっちも私で、どっちも他人には関係なくて、それで迷惑…嫌な気持ちにさせている。

ごめんなさい。

里美には相談できないけれど、美来にはたくさんのことを相談してきた。

辛いことを溜め込まないように、外に吐き出せば辛いことも半減すると思っていたから。

でもそれじゃ、きつと間に合ってなかったの。

だって今でも私の中は辛い気持ちで溢れてる。

辛いことを溜め込んで、耐えてきたから、私の心にはガタがきた。

美来以外にも相談できたら、こんなことにはならなかったんだろうなとは思っけど、美来以外って言ったら里美しかない。

恋愛経験のない里美にはこんなこと相談できなかったから、美来に

言えなかったことは全て自己満足で解決していたの。

9 話：ヲタク友達の妙な説得力

「夢乃」

今は昼休みな訳だから、行動なんて自由。
だから里美は追ってきたんだと思う。

里美は優しいけれど、優しすぎて、鈍感で…

「優斗、楽しそうだったね。話してなくていいの？」

階段に座り込んだ私は、顔は膝に埋めたままに聞いた。

「優斗、連と一緒に体育館に行ったよ」

膝に埋めたままの視線からは里美の行動なんて分からなかったけれど。

さすがに、横に座って頭に手を添えられれば、分かる。

「夢乃、悩みがあつたら話してね？あたしじゃ力になれないかもしれないけど」

悩みなんて…

「ないよ、悩みなんて」

里美に話せるような悩みは今はない。

友達としては最高の里美。

でも、恋愛相談するには……

「恋愛でも、何でも」

考えていること、見透かされているのだろうか？

それとも、私がいつも言っている通り、

『何年一緒にいると思ってるの？分かるんだからね』

ということなのだろうか？

でも、軽いことだけなら聞いてみる意味はある。

「じゃあ…何で優斗は私だけにちよっかい出してくると思う？」

「…それは漫画によくある、好きだから…じゃない？」

それが合っているかどうかなんて別にして。

「何で？」

「漫画でよくあるパターンだから」

漫画で経験積んだ、ということか。

そこがヲタクの凄いところ。

何でも漫画で経験を積む…

妙な説得力のあるものだ。

でも、私は妙な説得力に頷けるけれど、たぶん他の人が聞いたら呆れるんだろうな…

「漫画って…」

「だから、何でも相談してよ？美来だけにじゃなくて」

知られていたんだ、私が美来に相談してる、って…

知っている里美の気持ちはどうなんだろう…

「色んなもの溜め込んだら、ガタがくるでしょ？」

「うん…」

涙が、止まらない。

周りの見ている皆は私達のこと、どう思っただろう？

そんなことで泣いてバカみたい、って思う？

でも表面上の友情じゃなくて、これが本当の友情だと思うんだよ。

里美は優しい。

優しすぎて、こっちが申し訳なくなるくらい。

でも、優しすぎる里美だからこそ、美来にだけ相談している私を黙って見ていたんだと思う。

普通なら、差別されているようで友情なんて薄らいでいきそうじゃない？

これからは里美にも相談するよ、バカな考えはよして。

これからも里美は私の大事な親友だもんね。

「今まで、ごめんね」

10話：バレンタインの苦悩（前書き）

季節外れ、です。

実話系なので季節を無視してこれからもやっていきます。
いきなり、季節が飛ぶことはないと思いますが…

10話：バレンタインの苦悩

「もうすぐバレンタインだね」

おもむろに言った美来は期待を込めた目でこちらを見てくる。

バレンタイン——年に一度、女の子が勇気を出して好きな男の子に告白する日。

と、されてきた筈の日。

今となつては友チョコとか色々出てきてそんなものは薄らいできている。

仲の良い男子にだってあげている。

でもそれは他の女子達の話で、私はそんなことしない。

そんなに仲の良い男子はいない。

男子で話せたのは、今の優斗や連だけ。

「夢乃は優斗にチョコ、あげないの？」

あの一件から、恋愛事にも相談に乗ってくれる里美までもが。

変な誤解は受けなくなかった。

だから、チョコは毎年のように美来や里美といった仲の良い友達だけにしようとしていたのだけど…

目は、あげる、と言わんばかり。

「あげなきゃダメ！」

否、実際言った。

朝っぱらからの通学路での里美達のこの勢い。

いつもは優しい美来までもが、目の色を変えている。

彼女曰く、『恋愛事になると性格が変わる』らしい…

自分はよく、こんな個性豊かな人達と友達になれたものだ。と、まあそれは置いておいて。

「だってさ、優斗一人だけにあげたら変な誤解されそうだし」

男子にチョコなんて、あげたことがないから誤解を招く。

誤解というより、周りの人にバレるから嫌なんだ。

内心、渡したいけれど…

告げ口、陰口、コソコソ話、これは嫌。

自分は100%やっていないっていう自信はないけれど、それでバカにすることはないって言える。

告げ口、陰口、コソコソ話が広まって、皆にバカにされるのはもうたくさん。

そんな嫌な気持ちは小学6年の時に十分味わった。

だからこそ、止めてほしい。

だからこそ、優斗にも迷惑を掛けてしまうから、チョコなんて渡せない。

私も優斗も嫌な気持ちになるだけ。

11話：バレンタインの憂鬱

「はあ……」

バレンタインがこんなにも憂鬱に思ったことはなかった。美来には悪いがバレンタインなんてくるな、と思っていた。あれから優斗のこと、露骨に意識している。

「ねえ、優斗って甘いもの大丈夫かな？」

「何？やっぱりあげるの？」

里美の顔がにたり、と妖しげに歪む。

あれからは里美も美来のように腹黒くなってきた。

「考えたんだけど」

「何を？」

バレないように優斗にチョコを渡す方法。

一人に渡すのはバレる確率が高くなる。

だけど、数人に渡せばその確率は低くなる。

「カモフラージュとして、連にも渡すの。どう？」

「それは……」

良くない、っていうのは分かっている。

私は結局、バレてバカにされるのが怖いって逃げてるだけ。臆病者のまま、何も変わっていない。

「夢乃はそれでいいの？」

罪悪感はある。

でもそれしか、私には出来ない。

否、それでも出来るとは言切れない。

連には渡して、優斗には渡せない、ということも有り得る。想像しても、そう。

連には平然として渡せそう。

でも、優斗には平然として渡す姿が思い浮かばない。

「里美、夢乃」

「美来」

クラスの違う美来とは朝、登校する時ぐらいいしか逢わない。

だから授業の合間である今の時間に逢うことは、珍しかった。

「何話しているの？」

「夢乃がチョコを渡すかどうか」

「だから渡すんだってば」

強気の美来だから、告白することも出来たんだろうし、チョコを渡すことも出来たんだと思う。

だけど、そう言ったら…

「違うよ？告白するのは置いておいても、チョコを渡すのは凄く頑張ったの」

その言葉が本当なのは、分かった。

美来が本当に私に頑張ってほしいと思っていることも。

「じゃあ…用意だけは一応するから、さりげなく優斗に聞いてきて甘いものと苦いものどっちがいいか、って」

里美達にはあげるってことは毎年のことだったから作るものは決めていた。

『リンゴチョコパイ』

あとはチョコの部分ミルクにするかビターにするか、だった。

12話：バレンタインの気持ち（前書き）

二日間、更新サボってしまいました。
更新はサボり、出来はイマイチ…

12話：バレンタインの気持ち

だんだん、バレンタインは近づいてくる。

日ごとに私の気分は晴れず、渡すか、渡さないか、でまだ迷っていた。

こんな時、優柔不断な自分が嫌になる。

一度は決心しても、やっぱり駄目だ、と初めに戻ってしまふ。

本当にバレンタインなんてきてほしくない。

美来には悪いけど…

「何？まだ迷ってるの？」

「うん…」

横で、里美と美来は盛大な溜息を漏らした。

いい加減、呆れてくるのだろう。

私だって自分のことだけだぞ呆れてくる。

それだけ憂鬱に思えて、嫌なのだ。

「そういえば、さり気なく優斗に聞いてきたよ。どうでもいい男子も答えてたけど」

「本当！？」

何を喜んでいるのだから、渡すっていう決心もしていないくせに…

「苦い方がいいって」

「あゝやっぱり…」

大体の予想はついていた。

親から聞いていた話からも、優斗が甘いもの好きには思えなかった。甘いかさそういうのを考えなくておくと、優斗は和食の方が好きなんだと思う。

何となく…

だけとお菓子を和食にするのはたいしてお菓子作りなんてしない私には到底無理な話。

「で？聞いたんだから渡すよね？」

腹黒モードになった里美は怖い。美来も怖い…

どうしてこんなことになったのだろう。

優斗を好きだ、って気付くのがバレンタインを過ぎた時なら良かったのに、と本気で思った。

「まああとは夢乃の意志だけださ、でも渡さなかったら後悔するよ？あたしも後悔したくなかったから彼に渡したんだもん」後悔することは慣れている。

第一、小6の時に告白したのを後悔したくらいだ。後悔は慣れている。

後悔は、自分を戒めるのにちょうど良かったから。

「後悔してもいいの、慣れてるから」

「慣れてる、ってそういう問題じゃないでしょ？」

そついう問題、なんだ。

後悔しない人生なんてない。

誰かが後悔しなきゃ、我慢しなきゃ歯車は一定のスピードで回らないから。

「重く考えすぎなんだよ、夢乃は」

「まあ…考えておくよ。たぶん渡さないだろうけど」
「渡すの！！」

一体、どっちなんだろう？

渡す渡さないは私の自由なら今のセリフは何なのだろう？

でも、応援してくれている気持ちは十分、伝わったよ。

ありがとう

13話：バレンタインの動揺

ついにやってきてしまったこの日。

2月14日、バレンタインデー。

朝には友達同士でチョコを渡しあい、学校でもチョコを渡しあう人達。

「ほら、夢乃！」

「今は無理っ！放課後まで、ね？」

優斗の近くには連がいる。

連には知られたくない、連が優斗に一番近い人だから。だから、連が近くににいる時には、渡せない。

でも、連が優斗の近くにいない時であるのかな…？
今日に限ってそんな機会ないんじゃないか、と思う。

「あゝ、やっぱり渡せない！」

「何！？いきなり」

駄目駄目、私なんて全っ然駄目！

優斗に渡せたとしても、鼻で笑い飛ばされるしかない。
それが、優斗だから。

優斗は優しいけれど、意地悪だ。

それは私と里美にだけだ。

思い浮かぶのは、渡して笑い飛ばされる場面だけ。

「だって、絶対笑うしかない」

「誰が？」

「優斗しかいないでしょ」

呆れるほどに、優斗が素直に受け取ってくれる場面は想像つかない。
私は優斗にとって何なのだろうか？

ただのクラスメイト？

私にとっては違うのに…素直になれない自分は嫌い。
それどころか、自分の全てが嫌い。

どうして？こんなにも優斗に対する言動は変わったのに…

気付いてよ、バカ…鈍感…

こんな気持ちじゃ、渡せない…

「このチヨコ、どうしよう…」

友達には全部あげてしまった。

鞆の中に残るのは優斗に渡そう、と思っていたチヨコだけ。

連にあげる筈だったチヨコは、ない。

カモフラージュ用のチヨコが、ない。

数を、間違えてしまった。

「どうしよう…」

言葉がこれしか出てこない。

13話：バレンタインの動揺（後書き）

あと、1話でバレンタイン編は終わります。
予定ですが…

14話：バレンタインの不安

だんだんと渡すにはなれなくなってきた。
里美や美来が応援してくれている。

だけど、私が臆病者じゃどうしようもない。
渡したいのは山々だ、だけど、その勇気が出てこない。どうしても…

10分休みの間、ずっと優斗の様子を見ていた。

周りに誰もいない時はないか…チャンス機会はないか、と。

でもそれは全然、来なかった。

勇気のない自分が、臆病者の自分が、恨めしくて、恨めしくて、自分に腹が立つ。

幸せになれる筈のこの日を憂鬱な日に変えたのは、どこの誰だろうか？…間違いなく、私だ。

私自身が、憂鬱にしているんだ。

いつまで経っても私は成長しない、学習しない。

こんなに辛いのにどうして私は再び、恋などしたのだろうか？

あの時、決意したではないか。こんなにも辛いのなら、恋などもうしないと。頑丈に、鍵をかって。

告白が出来ない代わりに、言葉を交わすことが出来ない代わりに、フラれることのない世界に逃げ込んだのではないか。

なのに、何故その鍵を開けてしまったのだろうか。

答えは、ない。

自分自身への問いかけには、自分で答えを見つける他はないのだから。

そのまま、4時間の授業を受け、給食時間に入ってしまった。
渡す最後のチャンス機会は次の、昼休みしかなかった。

この時間だけに賭けるのは無謀だった。

給食後、当番の仕事を終わらせて教室に戻ると、優斗の姿はなかった。

きつと、体育館に行ったのだろう、と。

声を掛けて、ちよつと待っていて、と言えぬことはなかったのかもしれない。

だけどそれは明らかに怪しいから行動はしなかった。

今日は5時間授業。

この後に、渡せる機会がある時間は、ない。
チャンス

終わったんだ、と。

思えば、バカにされなくて済んだ、と喜んで。

でも少し、残念で、罪悪感が残っている。

「夢ちゃん」

声が出た方に目を向けると、小学校の時に仲の良かった友達が手招きをしていた。

「何？」

中学に入ってからクラスも離れたから、ほとんど話もしない。

私的にも、里美や美来のように本当に心の許せる人ではなかったし…

「これ、あげる」

そう言っただけ渡されたのは、小さなハート型のクッキーだった。

「ありがとう」

でも私はあまりもう親しくはないから、と用意はしてこなかった。

でもホワイトデーにわざわざ1人分だけ作るのも面倒だった。

家にも材料は残っていない。

そこで思い出したのが、優斗にあげる筈だった、チョコパイ。

「ちよつと待ってて」

教室に戻り、鞆の中に手をつ込む。

最後の1つ、優斗にあげようとして一番綺麗な形を選んだチョコパイ。

「はい」

「わあ、ありがとう。実はそれ好きな人にあげるつもりだったんだけど、無理だから」

と笑いながら言った。

「ちよつと、待って！駄目！そんなの、返すから渡しなよ！」

まるで他人事のように言った。

私だって渡せなかったから、あげたのに。

結局は同じことなのに。

それに、貰ったものを返すなんて失礼だとは、思ったけれど。

そんな気を遣っているほど私には余裕はない。

私のは返さなくていい、でも私は返すから、渡してきてよ。

でも、受け取ってはくれなかった。

返すことが出来なかった。

14話：バレンタインの不安（後書き）

この話でバレンタイン編を終わらせるつもりでしたが、もう1話書くことにしました。

次で本当にバレンタイン編を終わらせます。

15話：バレンタインの決意（前書き）

短編「愛していました」を読んでいない方は少し話を掴みづらいかもしれません。

読んでいなくてもあまり、差し支えはないと思いますが。

15話：バレンタインの決意

優斗に渡すことが出来なかった、という残念さと渡さなくて良かった、という安堵が入り混じっている。

それは応援してくれていた里美や美来に対する侮辱なのかもしれない。

「ごめんね」

心の中で、里美や美来に謝る。

そんなことしたって意味はない、と分かってはいる。

でも、今の私には直接言う勇氣はない。

そういえば、もう一人のヲタク友達が私を二次元に戻そうと策略していたつけ。

簡単にいえば、妄想小説で。

その小説を読んだのは、朝だった。

その時は何も思えずにいたけれど、今、再び読んでみる。

その小説は、見事に私の心の奥を突いていた。

私をヲタクに戻したい、と本当に思っているんだ、と。

ほんの少しだけ、戻ってみようかな、という気になってしまった。

でも、現実には三次元に戻るためにヲタクを最近は批判してきた。

だから、そんな簡単に戻ることは出来なかった。

優斗の好きでいるのは辛かった。

でも、マンガのキャラを好きでいるのも会えないのと、話せないと

で、辛いのは同じだった。

だから、せめて普通でいよう、と。

他の人に批判されないように普通でいよう、と決めた。

バレンタインが過ぎた数週間後、私はこの決意を忘れないように、最後になるだろう妄想小説を書いた。

それが、『愛していました』

私が好きだった彼は平面上にいる人だから、傷つきはしない。

会えないのだから、付き合ってたなどいない。

でも、それを全て無視して、彼がこの世にいるように、私の彼だとういうように妄想して、彼を傷つけた、という想像で私の決意を書いた。

不完全なまま彼の元を離れて、傷つける分傷つきたい、と。

そして傷付けたのだから、後戻りはしない。

彼の元に帰りはしない、と決めた。

それは全て私の我儘だ。^{ワガママ}

これが現実だったら、どうなっていただろう？

現実的には私には彼氏など一度も出来たことはない。

だから、分からない。

でも、私は絶対にヲタクには戻らない。

それが優斗を好きでい続けることと繋がっている。

優斗にヲタクだとバカにされるから、止めた。

変わっていない部分はたくさんある。

だけど、新たに決意が出来た。

それでこのバレンタインは十分だった。

来年は渡せるように努力しよう。

それまでに仲良くなれば、一番良いのだけど…

15話：バレンタインの決意（後書き）

やっと、バレンタイン編終わりました。

長かったです。

こんなにも長くなるとは思いませんでした。

16話：中学2年修了（前書き）

あまり話は急展開にはなりません。
いきなり話が飛んでいる気がします。が、
実話系なので全てを覚えていられなくて…

16話：中学2年修了

あのバレンタインから何週間か経った。

正直、後悔してないなんて言えない。

思わず、それを口にしてしまった。

「やっぱ渡せば良かったかな…」

「だから後悔するって言ったじゃん」

人が変わったように美来は毒づいてきた。

別に優斗を嫌いになった訳じゃないから問題はないと思うのだけど…

いつからか…きつと優斗が気になり始めた時から、夜になると何か気になって思わず、窓の外を見てしまう。

そこから見えるのは優斗の部屋だと思われる窓。

そこから明かりが漏れていれば、何か、何故か、あああそこにいるんだ、と嬉しくなる。

明かりが消えていれば、少し残念な気持ちになる。

それは少し、怪しい行動。

でも気になってしまう。

もう3月。

別れの月。

私は部活に入っている訳ではなかったから嫌だとは思わなかった。

ただ、卒業式は辛かった。

卒業式は在校生である私はただ黙って座っているだけ。

「はあゝ終わった。里美帰る？」

「うん、そうだ。卒業式の最中に優斗のお腹鳴っていたんだって」
「いたんだって、というのは里美が隣に座っていた子から聞いたらしい。」

私は優斗の後ろ姿しか見えないところが座席だったからどんな状況は分からない。

ただ気が付けば、視線は優斗の方へ向いていた。

「あ、優斗」

「部活の先輩に記念品とか？」

そうかも、優斗はバスケット部に入っているから。

そういえば、4月から私の弟が中学入学か…と少し憂鬱になる。

でもこれで弟がそのままバスケット部に入ってくれば試合とか見にいけるのに。

まだ優斗がバスケットをしている姿はあまり、見たことがない。

淡い期待を胸に私は優斗の姿を見ながら家に帰った。

17話：里美の策略（前書き）

中学校最高学年。

受験生です。

新たな学年から暗い話です。

17話：里美の策略

4月に入り、春休みだというのに宿題があり、それに取り掛かって
いた。

受験生になる、というのはこんなにも休みの使い方が違ってくるの
か、と。

「はあ……」

憂鬱なのは宿題の所為もあるが、こんなにも家が近いのに優斗の姿
を全く見ないこと。

最高学年、受験生でもある中学3年になってしまった。

あまり、良い気分ではない。

私の学校は3年生は新入生の教室作りや教室までの誘導。

少し、期待をしていた。

何を、というのは分からないけど……

新入生の誘導係になった私は廊下の掃除に当たった。

男子は新入生の教科書運びだったから、会うことはあまりなかった。
でも……

「あ……」

優斗が教科書を持ってこっちに歩いてきた。

私は何だか、恥ずかしくて里美の後ろに隠れた。

「何？」

「い、いや……」

里美は気付いたように、私から離れて優斗に話し掛けた。

「重そうだね、手伝おうか？」

優斗にはそう言うけど、前に行った他の男子には「あえて手伝わな
い、ガンバ」と言っていたのに……

「持って」

「だって、夢乃。行つて」

ああ、これは里美の策略なんだ、とすぐに分かった。

「いや、でもまだ掃除してないし。無理っ……」

優斗が持て、と近づいてくるのに凄くドキドキして、赤面していたんじゃないか、と思う。

掃除担当の先生が来ていなくて、掃除をまだやっていなかったのは事実だ。

「重い」

そうは言っけど、その横にいる男子の方が明らかに重そうではあった。

でもその子は重いとも言わずに、普通でいる。

「いや……ごめん」

そう断ると、優斗は不満ふまんげ気に3階にある1年生の教室に行くため、階段を上って行った。

私は優斗の後ろ姿を見るだけ。

「はあ……」

掃除担当の先生が来て、階段の掃除をしている時、後悔した。

そんなにはつきり断らずとも、半分持つくらいすれば良かったのではないのか、と。

でももし、私がいけない間に先生が来て、皆に掃除をやってもらう、というのが嫌だったから。

里美は何かと協力してくれる。

策略をする時もあるけれど……

でもあまり、我儘ワガママもいつてられない。

もう少し、心地の良い断り方はなかったものか……

もっと、優しい女の子になりたい。

18話：好きな人と友達

入学式が終わった次の日、教室に行くと、前と違った席に着いた。新学期初日に、席替えをしたんだった、と。

今回は私の後ろの席が里美だった。

それはとても嬉しいことであつた、けれど…

優斗の席が少し離れた場所にある。

席替えをしている時に、里美が目で優斗の席が私の隣になるんじゃないか、と訴えていた。

私の席は最後まで決まっておらず、また優斗の席も決まっていなかった。

だから、少し期待していた。

優斗が隣の席になるのではないかと。

でもその予想は大いに外れた。

その代わりに、クラスでもまあまあ仲の良い子が優斗の隣になっていた。

その子は席替えをする前の私の席の後ろだった子。

思わず、「いいなあ」と言った。

でもその子は、こっちが取り乱したくなるほどの鈍感で「何で？」と言ってきた。

そして私の隣は、私が小学生の時に好きだった人。

「何かさあ、複雑だわ」

後ろを向いて、里美に愚痴ぐちを漏らした。

里美はただ、本を片手に私の愚痴を聞いてくれている。

「友達と席が近くなるのと、好きな人と席が近くなるのどっちがいんだろうね？」

つまりは友達と好きな人、どっちを取るか、ということだ。

「それは…」

恋愛対象になる人物がいたことのない里美には聞くべきことではなかったのかもしれない。

されがいる私にだって、答えは見つからない。

以前に美来にも聞いたことがある。

でも、彼氏がいる美来ですら迷っていた。

されだけ私達は強い絆で結ばれているんだと思う。

だから、どっちか、なんて選べない。

選べる訳がないんだ。

もし、選べる人がいるならば、それは友達同士が絆で結ばれていないんじゃないか、と思う。

でもそれがもし、苦渋の決断ならば、私はその人を尊敬したい。

私は絶対に選べないから。

里美や美来か、優斗か、なんて……

19話：今更な疑問

ふと、思ったことがあった。

「ねえ、美来」

「何？」

「優斗って、付き合っている人とか、好きな人とかいるのかな？」
今更なことだ。

凄く今更。

どうして今までそんなことを思わなかったのか不思議なくらい、今更な疑問。

他の、どおでもいい人のそういう話なら聞いたことがあった。

美来は恋愛事に関しては凄い人で、他の人の関係をよく聞いていた
りした。

誰と誰が付き合ったとか、別れた、とか。

でもその中に優斗の話はない。

「聞いたことないな。でもないと思うけどなあ」

確かに優斗は恋愛とかには興味がなさそうな顔をしている。

家が近いから、結構窓の外を見ていたりしていたけれど、女の子が
出入りしているような日は一度もなかった。

「まあ、情報があつたら教えるね」

「うん」

そこでクラスの違う美来と別れた訳だけど…

「あ、ヲタク」

教室に入った時、聞いたのは連^{レン}の私に対する『ヲタク』発言だった。

「あのねえ、私だっていつまでもマンガのキャラ見てキヤーキヤー
言っていないから。」

ちゃんと、現実好きな人だっているから」

その時はその場の何と言うか、ノリで言ってしまった。

まあ連にだつたら言っても何の支障もないか、と。

「あ、優斗」

ちょうどその時、教室にいなかった優斗が戻ってきた。

「優斗、岸本に好きな奴いるんだって」

その時、私は一瞬、固まった。

考えが甘かった。

優斗と仲が良いのは連だ。

そうするといつ優斗の耳にそれが入るか分からない。

別に優斗が好きだ、と連に言った訳ではないから大丈夫なのだろうけど。

「うわあゝヲタクのくせにゝうわあゝうわあゝ」

優斗はこんな反応だった。

そんなに私が三次元に恋をすることは変なのだろうか。

私はそんなに優斗に軽蔑けいべつされているのだろうか。

その場は明るく振る舞った。

優斗に軽く怒って、追い掛け回して。

でも本当は、何だか悲しくて仕方なかったんだよ。

私に好きな人が出来た、と優斗が知った時、優斗はどんな反応をするか、気にはなっていた。

優斗を好きになってから、もう結構経つ。

そのうち、優斗に私が優斗が好きだとバレてしまうのではないかと怯おびえてはいた。

いつまで隠し通せるか、顔に出ないように出来るか、と。

「美来ゝ」

「何、どうしたの？」

連が優斗に私が三次元に好きな人が出来た、と言ったと、伝えた。私の分かりにくい説明で、美来は頷いてくれた。

「はあゝ、その時の優斗の反応は？」

「ヲタクのくせに、だって」

それと共にこの話の詳細を伝えた。

私にとっては微妙な反応だった。

でも、人生の先輩ともいえる美来はこの反応をどう感じ取るのだろうか。

「男子はガキだからねえ」からかうこと、とかでしか愛情表現を出さないんだよ」

友達のこととは応援したい。

それは小学校の頃も今も同じだ。

だから、美来はこう言ったのだと思う。

ポジティブでいてほしいから、と…

友達の好きな人は友達を好きでいてほしいから…

20話：私の『壁』

4月の中旬、理科の実験の班が変更された。どうやって決めたか、は知らない。

多分、先生が適当に、決めたのだと思う。それにしても、メンバーがあまりにもひどいと思う。

初めは男子から順に誰が何班と伝えられていた。

私は優斗の班だけを聞いていた。

「沢本、9班」

優斗は9班か、と思いながら、一緒に班だったらいいな、なんて考えていた。

先生は言っていく班員に規則性になんてなくて、分からなかった。

「岸倉、2班」

ああ、同じじゃなかった。

前と班が変わらないや、と少し投げやり状態だった。

でもその後……

「日向、9班」

日向、とは私の友達で日向彩音ひゅうが あやねと言う。

凄く変わっていて、れっきとしたヲタクでそれに誇りを持っていた。

私にはそれが理解できなくて、私が三次元に行った時に引き戻そうと、夢小説ドリーム小説を書いたのがこの彩音だった。

「里美何班だった？」

「7班」

里美とも離れていて、私が同じ班だった人は全然仲が良くない人だった。

それに意地悪なほどに友達が、私の好きな人と同じ班。どうしてこんなに、ぴったりとしてしまうのだろうか？

「何か、彩音が羨ましい」

「ああ…何か、ごめん」

いや、彩音に謝られても。

彩音が謝ることじゃないし、謝られても逆にこっちが困る。

何か、悪いことをしたようで、さ…

「何でもさ、人がいい訳？」

そう言うのは優斗の班があまりにもいい人揃いだっただから。

優斗に連に彩音にまあ、後の一人は一緒に登校している、ってだけであまり接点はない。

前の班では連と一緒に、煩^{わづ}かったけれど、まあまあ楽しかったのがあった。

でも今回は優斗と連と一緒に、その班だったらどんなに楽しいだろう。

連がいたら、優斗と結構話せるのにな…

浮かぶのは醜^{みにく}い、欲^{よく}ばかり。

自分では何も行動しない、臆^{おくびょう}病者の理^{イイワケ}由。

醜^{みにく}い、ったらありやしない。

自分でも分かっているんだ、駄目だって。

でも、過去があるから中々行動に移せない。

いつまでも、過去になんて縛^{しば}られたくはないのだけど…

班を変えてから、初めての実験。

私を含めて班員4名中、2人が休み、残り私のもう一人で実験をする事になった。

そいつは男子で、彼女がいる奴だった。

そういう人とは関わりたくないのが、一番強かった。

私は優斗の彼女でもないのに女子と仲良くしていると、嫉妬する。

だから、こいつの彼女も嫉妬するんじゃないだろうか、と思って関わりたくはなかった。

彩音はそんなのお構いなしに接しているようだけど。

これは私の『壁』だ。

友達の好きな人とは関わらない。

彼女がいる、と知っている男子とは関わらない。

見た目も真面目^{まじめ}過ぎるように、ピシッとして。

だから髪型も天パだったのをストレートにして。

視力が下がったことを逆手にとり、眼鏡で真面目な感じにした。

目が小さいことも嫌だったから、眼鏡をかけられることは都合が良かった。

真面目、という壁で人を近寄らせ難い人に私はなった。

周りに私がどう思われているかが、凄く気になって、でも関わらなければ都合の悪いことなどないのではないかと。

だから、私は厚い壁をつくった。

でも壁をつくることによって、私は人が怖くて、臆病者のままで、逃げて来た。

だから、告白なんて大それたことは出来ないのだ。

これからどうしたらいいか、は分からない。

絶対に達成することの出来ない目標を立てて告白をしないようにすることを考えていた。

20話：私の『壁』（後書き）

《言語解読》

夢小説《ドリーム小説》とはヲタクの妄想を表した小説です。

21話：修学旅行の用意（前書き）

大イベント『修学旅行編』に入ります。

これはかなり長くなる予定です。

頑張って書くので、見て下されば嬉しいです。

21話：修学旅行の用意

「あのさあ、思ったんだけど…」

最近は何だかやる気が出ずに、ほとんど机に突っ伏した状態である。それを彩音は「元気がない」と言った。

別に元気がない訳じゃない。

ただ、悩みっぱなしなだけだ。

客観的に見ると元気がないように見えるのかもしれないが…

「何を思ったの？」

「絶対に達成出来ない目標。達成できたら優斗に告白。でも絶対に達成出来ない」

大事なところだから、二度言った。

「10キロ減ったら優斗に告白」

自分でもバカだな、とは思うけど。

絶対に無理だって、分かってるから固くこう決めれば行動しなくて済む。

それはやっぱり逃げているんだな、と。

「あと、告白する最終期限は修学旅行まで」

「それは頑張っている人への侮辱ぶじよくだよ」

私は全てから逃げている。

全ての頑張っている人への侮辱だってことも分かっている。

私は酷い女だよ。

だから優斗に告白だなんて出来ないんだ。

三年生になってすぐに、5月の最後にある修学旅行の話になった。

班決めや部屋決め、自主研修でどこに行くか、など。

班は男子と女子で違うから仕方がないけど、バスの座席とかは出来るだけ近くに行きたいでしょ？

「班で自主研修など、主な行動をしてもらう」

つまり、ほとんど同じ行動をとる班ということだ。

男女別れて、話し合いで決めることにして、女子の中心的話を進める人に私はなっていた。

初めに実行委員をやることにしたから、当たり前なのかもしれないけれど。

「えーと、じゃあまず、仲良い人と適当に固まってそれから調整」
勿論私は里美と彩音と同じ班。

「うーん、じゃあことごとくつついてもらっていい？」

そんな感じで調整して、見事に女子とは思えない速さで班決めが終わった。

女子って本当に仲良い人じゃないと群れることなんてない。

だけど、それが無いからうちのクラスはいいと思う。

小学校の時は酷かったから。

「珍しいよね、女子でこんなに早く決まるなんて」

「そう？」

彩音にとってはそうではないかもしれない。

でも小学校の時にあんなことがあった私にとっては凄く、珍しいと思う。

「小5の時に皆に承諾を得てから完全に決めた班に文句言いだした奴がいてさ」

「うわぁ、何それ」

「その子にも承諾を得たのにも関わらずに、だよ？しかも嫌だ、って泣き出してさ。どれだけ我儘ワガママなんだよ、って」

そんなことを思い出した後に一つだけの男女混合の班を決めることになった。

川下りの班かわくだがそれだ。

どうにか優斗と一緒になれないかなあ…なんて思っていた。
それは臆病者の、淡い期待だった。

22話：ラフティングの班

ラフティングの班も男女別れて決めることになった。

どうすれば優斗と同じ班になれるか、しかほぼ考えていなかった。

一応、また中心のになつて話を進めていた訳だけど…

周りがどんな班を決めていく。

黒板には男子がもう既に班を書いていつているところだった。

一つの班には『前田』の文字。

連だ、連の名前があるなら優斗も同じ班だろう、と思い、その班になりたかった。

「ねえ、夢乃」

「何？」

「もう書いていい？」

まだ全部は決まっていけないけれど、まあいいか、なんて少し軽めに考えてしまった。

「いいよ」

そうして決まった女子の一つの班が黒板に名前を書いた。

…前田、と書かれた班のところに…

「あ…」

「夢乃…」

里美が呆然と、私を見ている。

終わった、優斗と同じ班にはもうなれない。

悲しかった、今まで何も好きになつてくれるような努力はしてこなかったけれど、でも同じ班になりたかった。

そう思ったのが、いけなかったのかな。

きつと、図々し過ぎてそんなこと許されなかったんだと思う。

「こういうのは自然の成り行きに任せた方が旨くいくの」^{つま}

里美の横で彩音が呟いた。

自然の成り行きは、あまり信じることが出来なかった。

小学校の時も友達と好きな人と同じ班になれるように策略を立てていたし、近くになれるように、嘘を吐いたりもした。

「里美…泣いていい？」

このままじゃ本当に泣くんじゃないか、と思うくらい悲しくなってきた。

軽く考えていた自分が憎らしくて。

でもここで私が泣いたら、話が進まなくなる。

里美や彩音には色々、力になってもらったし、我儘ワガママも聞いてもらった。

辻褄つじつまの合わないようなこと言って、変だ、と思った人もいると思う。だから、こんなところで躓つまづいていられないし、これ以上迷惑をかける訳にもいかない。

ぐつと堪こらえて、話を進めることにした。

「夢乃、いいの？」

「いいの、これ以上やると迷惑かけそうだし、優斗に嫌われたくもないし。離れられたら、諦めがつきそうだし」

本当はこんなの嘘だ。

好きだから、嫌われるのが怖いだけ。

告白して今までと同じく出来ないなら、それこそ苦しいから。

優斗といると、話していると、ドキドキして間が持ちそうにないから。

「どこの班がいい？」

余りの班で、男子が一番マシ…って言ったら失礼だけど。

まだ話しやすそうな人がいるところにした。

23話：ラフティングの奇跡

私達、女子がラフティングの班を決め終わった後、男子も決め終わ
りその時間が終わった。

あまり期待はしなかった。

というより、もう絶対に同じ班になることはない、思っていたの
だ。

「男子決め直すから集まれ」

隣の席の男子が決める係だったらしく、男子を集め出した。

私はこれといった用事がなく、そのまま席に座っていた。

邪魔だとは思うけれど、でも避けようとは思わない。

「里美、男子決め直すとか言ってる」

「優斗と一緒になれるといいね」

「うん」

そうは言っても、諦めているのが本音だ。

隣では班の組み合わせを考えているのが見えたから。

私の班と同じ班にしようとしている班は、全然違ったから。

「岸倉」

授業中に関係のない話は厳禁だけど、そこまで私は口煩くはない。

「何？」

話し掛けてきたのは斜め前の席の奴で、嶋野しまのといって、あまり好ま
しい性格ではない。

はつきり言って煩うるさくて、前に席が近くなった時は嫌だった。
今はそうでもないけれど、でも好きでもない。

「ラフティングのときにお前、川に落とすから」

意味が、分からなかった。

「は？何、あんたと同じ班？」

「そう、だから落とす」

落とされたくはない、でもそれはどうでもいい方に近くて、他には誰が同じ班なのか気がなった。

「落とさないでほしいんだけど…じゃなくて、他に誰が同じ？」

「えーと…三上^{みかみ}と優斗」

その名前を聞いた時、驚きと嬉しさが入り混じっていた。

でもそいつには冷静を装って、

「どうやってそう決めたの？」

「適当」

嶋野はそう答えた。

嶋野も班の組み合わせを決めることが出来たのなら、彼女と同じ班になればいい。

確か、嶋野には彼女がいた筈。

でもそれは言わなかった。

だってどんな形であれ、ちょっと嫌な嶋野がようやく、優斗と同じ班ということに変わりではなくて、とても嬉しいことだから。

「里美、優斗と同じ班になれたよ」

授業が終わるとともに、後ろを向いて里美に報告した。

こんなに嬉しいことはないから。

「良かったね！」

「でも私、怖いのが苦手だから叫ぶな…」

里美は「どうして叫んじゃ駄目なの？」そんな顔をしている。

里美も私と同じく絶叫系とかは苦手だ。

「だってさ、煩いとか思われそうじゃん？」

優斗の機嫌はすぐ悪くなったりする。

少しのことでキレられたりするから、怖い時もある。だけど、それがカッコいいな、なんて思ったりする。

重症、と言ったらそうかもしれない。

24話：修学旅行に出発

修学旅行までに色々とおった。

それでも私は実行委員長としての仕事を進めていく。

毎日毎日、天気を気にして、雨に変わりが無いことにガツカリする。そして、当日になった。

朝、起きたのは5時半。

眠たい目を擦りながら、リビングへ下りていく。

露が落ちる音に耳を澄ませて、窓の外を見る。

やっぱり天気は生憎の雨。

でも大降りではないだけ、良かったと思う。

今日の予定はラフティングだけだったから別に雨が降っていようが、関係ない。

「じゃ、行ってきます」

駅の前までお母さんに送ってもらい、皆が集まっているところへ向かう。

雨が降っている為、予定の場所に皆はいない。

「あ、里美」

「おはよう、夢乃」

集合場所のちよつと手前で里美や彩音が手を振る。

50人を超す人が一点に集まっては通行の邪魔になっていると思う

けど、先生はそれにあまり言及していないみたいだった。

少ししてから…

「雨が降っているから入った所で集会する」

たくさん色々な人に見送られて、私達は故郷を出発した。

自分の家が、部屋が好きだった私にとってはあまり楽しみなことではない行事だった。

特急電車に乗って、決められた席に座る。

私の席は皆とは違う車両で、優斗もいない。

他の車両とは行き来、出来ないから約3時間半は優斗とは会えない。

「疲れきっている帰りだけ同じ車両なんて…」

少し、複雑だった。

告白のタイムリミットは修学旅行が終わるまで。

もしかしたら帰りには決着が付いているかもしれないのに、席が近いなんて…そう思った。

告白のタイムリミットを修学旅行が終わるまでにしたのは理由があった。

これからの受験に真剣に取り組みたかったから。

勉強が疎かおろそになってしまうのではないのだろうか、と不安だった。

だから、早めに決着を…そう思った。

「ねえ、里美」

「何？」

「私が告白する時、協力してくれる？」

「うん」

怖いことも色々ある。

駄目だったとき、これまでと同じ態度で接してくれるか、とか。

でも、こんないつまでもウジウジしているままじゃ何も出来ないだろうから。

25話：依存？重症？

特急電車から降りると一旦、クラスで集まった。

男女各一列で、実行委員だった私は女子の先頭に立った。

男子の先頭も実行委員だろうと思ったのに、何故か先頭に立ったのは優斗だった。

優斗は実行委員ではない。

なのに男子の先頭となって立ち、私の隣にいる。

狭い通路に並んでいるために前後左右の間隔は詰められ、私と優斗の間も詰められて、密着する。

後ろを向いて小声で同じ班の緒原圭子おはの けいこに「凄い近い」なんて言うてみる。

返ってきたのは「良かったね」の言葉だった。

それからバスに乗り込むと、何故か優斗が私の席の斜め後ろに座っていた。

しおりの座席表では私の後ろに座っている圭子の斜め後ろの筈だった。

しおりをもう一度確認すると、男子が一列分ずれて座っていることに気付く。

「男子、一列ずつずれてる」

きつと細かいなあ、とか別にそんなの良いじゃん、とか思われているかもしれないけれど、どっちにしても動くことになるだろうから。

優斗が離れてしまうのは少し嫌だったけれど、でもどっちにしろ、そうなってしまうのだから、あまり大差はない。

この天気では外で昼食ではないな、と考え、連絡をどうするか悩んでいた。

「えーと、連絡するから聞いて」

皆が静まったのを確認してから要件を喋り出す。

一応、皆を見回しながら連絡をしているつもりだったけれど、優斗をほとんど見ていたと思う。

バスでの隣は里美だ。

というより、バスでも行きの特急電車でも帰りの特急電車でも隣は里美だ。

2つ斜め後ろの方の優斗をたまに見たり、後ろに座っている圭子と話す時に優斗を見たり、と…

やっぱり、重症なんじゃないか…

というより、依存してしまっているんじゃないかな、とも思う。

26話：ラフティング、出発

昼食後、ラフティング会場に到着するや否やガイドさんが説明をするためにバスへ乗り込んできた。

その人は男性だが髪は長く、耳には大きなピアスというなんとも若者！という格好をしていた。

しかもその人は私達9班のガイドさんらしい。

この人で大丈夫なのだろうか、という不安が少しあった。

「じゃあ、女子は更衣室に行つて着替えて」

そう指示を受け、私達は更衣室に向かう。

「里美、眼鏡どうする？」

「落ちたら嫌だもんね」

どうせ濡れたら見えぬない。

それなら初めから付けないで、絶対に落ちない策をとればいい。

「私付けない」

そう言つて、里美より先に更衣室を出た。

「わっ、岸倉、眼鏡どうした？」

真つ先にそれを質問してきたのは嶋野だった。

「落ちたら嫌だから取つてきた、だから見えないの」

視力0.1の世界を少し甘く見ていた。

朝とか夜は眼鏡を掛けていないから大丈夫だ、とか少し思っていた。

「あれ？里美と彩音は？」

「里美の眼鏡を取りに行くのについて行つたよ」

里美は私と違つて視力は0.1もない。

だからほとんど何も見えない状態なのだと思う。

「はいこれ、岸倉さんの。これが石田さんの……あれ？石田さん？」

事前に取っていたデータを基にガイドさんがウェットスーツを手渡していく。

そこで里美がいらないことに気がついたらしい。

「あ、眼鏡を取りに行きました」

「あーそっか、じゃあ先に準備しちゃって」

そう言われるがままに着々と準備を進めていくことにした。

視界が悪くて細かいものが見えず、準備がどうしてももたついてしまふ。

「うゝ、見えない…」

ウェットスーツのどこに手とか足とか入れるのが全く分からないというより、見えないのだ。

やっと入った、と思っても次は後ろのチャックが閉められない。それは当り前のことなのだけど。

「彩音」

「あーちよつと待つて」

そう言い、私の後ろに回るとチャックをジューと閉めてくれた。

「ありがとう」

「準備が出来たな、じゃあ行くぞ」

ガイドさんの後に男子が付いて行き、私はその後について行く。視界が悪く、少しでも目を離してしまうと誰が誰だか分からなくなってしまう。

「あ、嶋野のヘルメットなんか動物描いてる」

何となく薄っすらとオットセイのような絵が描かれている。

良く見ると、嶋野よりすごいのが優斗のヘルメットに描かれていた。

「優斗のヘルメットにも何か描いてあるよ？」

一番派手なヘルメットだった。

「私のも描いてる？」

そう言いながら里美の方を振り返り、ヘルメットを見せてみる。

「うっん、描いてないよ」

ボートを持ちながら川まで運ぶ。

川までの道は急で見えない私にとっては結構危険。

一歩間違えれば、そのまま前に飛んでいきそうな勢いだ。

「よし、ここでOK」

ガイドさんの指示通りにその場にボートを下ろし、説明を受ける。

適当にボート内に座ると、優斗が隣に座り、少しビックリしたがバランスが悪いらしく、優斗は私の後ろに座った。

前漕ぎまえこや後ろ漕ぎうしろこ、どんどん話は進んでいく。

それでも上手くタイミングが掴めていない私は

前に座っている彩音の漕いでいるヤツにぶつかったり、優斗のにぶつかったり、としていた。

川に入ってからと同じでタイミングは合わず、優斗にぶつかったり彩音にぶつかったりしていた。

しまいには優斗に

「もっと漕げ」

とまで言われてしまった。

流れが急になったり緩やかになったり、優斗や嶋野は楽しんでいるようだったけれど、私は怖い。

あの、ふわっと浮く感じとかが嫌だ。

途中で彩音と里美、優斗と嶋野が席を交代をした。

よって必然的に優斗の顔が見える訳だ。

彩音には「席どうする？」と聞かれ、「いいよ、このままで。というか、このままがいい」なんて言ってしまった。

その言葉が優斗に聞こえていませんように、と願い、優斗が凄く近くにすることが嬉しくて堪たまらなかった。

私はこの修学旅行に通じる中でどれだけ里美や彩音に我儘ワガママを言ってきたのだろうか。

きっと、迷惑だっただろう。

そう思ったが、決着の期日を決めていたから私はそれまで甘えさせ

てもらうことにした。

これが終わったら、たくさん謝ろう、迷惑かけた、と。

ワガママ
我儘をたくさん言ってしまいごめんなさい、と。

里美にも彩音にも圭子にも美来にも…

協力してくれた全ての人に。

気付けば、ボートはゴール地点に着いてしまい、少しガツカリしてしまっただ。

怖いのは嫌いだけど、でも優斗が同じ班ならもう一回ぐらいならやってもいい、そう思っていた。

この時間が終わらなければいいのに、少しだけそう思っていたんだ。

27話：失敗

修学旅行1日目のホテル。

部屋は里美と彩音と一緒に。

優斗の部屋は凄く離れているところ。

男子と女子の部屋を近くにすることなんて有り得ないから別にそれはどうでも良かった。

告白する気もそんなになかったし。

（取りあえず、着替えよ…）

そう思っで、バッグから着替えのジャージを取り出し、着替え出す。女子同士だから、下着までは別にいいかな、なんて思っで普通に着替えていた。

「夢乃エロい」

彩音にそう言われた時は、またこのヲタクは…と呆れたもんだ。^{あき}

夕食後の自由時間、彩音には言ったら問題発言だ、と思ひ里美にだけこっそりと話とことがある。

「ねえもし私が告白するって言ったら協力してくれる？」

^{ワガママ}我儘は告白するまで。

それまでは…

今まで言っできた分の我儘は返そうとしていた。^{ワガママ}

「する！」

「告白する時、里美達が圭子の部屋に避難。誰かに優斗呼んで来てもらっでもいい？」

有り得ないくらいの超ド級の我儘。^{ワガママ}

これじゃ、決心が付いたのかも分からないじゃない。

普通、気持ちを伝える者が行くべきじゃない？

「夢乃」

「美来」

美来を見るなり、里美は未来を連れて部屋の隅に行く。
きつと、さつき里美に話したことを話しているのだと思う。
一番伝えなきゃいけないのは、美来なんだろう。
色々と協力してくれて、色々と助言をしてくれて。
もちろん、里美にも彩音にも圭子にも…協力してくれた全ての人に
伝えるべき…なんだろう。

自由時間が終わるのは8時55分。

今は8時半……

まだ、決心が付けない。

告白、して駄目だったとき、その時どう、優斗と接したらいいかが
分らない。

自由時間が終わったあとには班長会議がある。

優斗も私も班長、どうしても会っちゃう。

でも…それでも…

「里美、彩音…優斗、呼んで来てくれる…？」

「うん」

決めた…駄目でも冷静を装^{よそお}うことは出来る。

その自信はある、ネガティブでいれば悲しむことは何もない。

決心したのは自由時間が終わる約10分前。

時間ギリギリに決心するのもどうかと思うけれど…

皆が…部屋にいる皆が出ていく。

この人達、皆が私に協力してくれるんだ。

ありがとう…そして、ごめんね…我儘^{ワガママ}ばかり言って…

皆が部屋を出て行って、約2分。

彩音と優斗の声らしきものが聞こえる。

「ちよつといい？この部屋入って」

「え、でももう時間だよ？」

優斗らしくない優しい言葉で抗議しているように聞こえる。

キィ……とドアが開く音も。

ついに、来た。

ドクン、ドクン…と心臓の音が今までにないくらい大きな音になっている。

でも、それから何分経っても優斗は私の前には現れなかった。

心臓の音はどんどん大きくなり、静かな部屋には私の心臓の音と虚しい冷蔵庫の音。

自由時間が終わる時間になり、そろり…と部屋のドアを開けてみる。すると、美来と会った。

「あれ？」

右の方、圭子の部屋の方を見ると里美や彩音がいた。

「あれ？」

そう言われるも、こっちが「あれ？」と言いたいぐらいだ。

「沢本、来なかったの？」

「う、うん」

どうやら、失敗したらしく、それに気付くまでにそう時間は掛からなかった。

「ま、反省しますか」

明るく振る舞ったりしてみたりする。

本当のこと言うと…

「ヤバ…足が凄い震えてる…」

何気に立ってみると、足は震えて立っていることなんてままならない。

「沢本に謝っておいた方がいいかな、何も知らずに分からない部屋の前に放り出されたんだし」

「あ、私も謝っておいた方がいいかな」

「それは別にいいんじゃない？ 向こうは夢乃が呼んだ、って知らないんだし」

班反省しながら、色々と不安なことを聞いてみた。

その後の班長会議、優斗は普通だった。

怒っている風でも何もなく。

ああ、大丈夫だな…と。

私も普通に話すことが出来たし…

28話：駄目人間

修学旅行2日目、自主研修練習日。

午前中は遊園地で遊び、午後からは自主研修の練習という日。

遊園地といっても絶叫系が苦手な私は乗るものなど何もなく、ただ彩音達を見守るだけ。

朝早かったため、まだ何も起動はしていない。

彩音は絶叫系は別に異常がないらしく、先生もおススメの『ハリケーン』という乗り物の列に並んだ。

足を付けるところがないのに、途中で逆さになったら気持ち悪くて仕方がない。

でもそこに連や優斗も並んでいた。

私はカメラを取り出して、彩音を一枚撮り、ドサクサに紛れて優斗も撮った。

見てみると笑顔の優斗が写っている。

画像もそれなりに綺麗で満足した。

そのあとは何事もなかったように彩音を笑顔で送った。

こんな化け物コースターに乗ったら私は笑顔では帰ってこられないけれど…

出口は入口と反対方向にあり、私は走って出口に向かった。

またドサクサに紛れて撮ろうと思ったが、失敗。

あまり表情の変わらない彩音をもう一度、撮った。

それから班で回りながら私は乗り物には乗らず、里美や彩音、圭子に乗っているのを見ていた。

絶対に絶叫系なんて乗れないから。

皆を見ながらたまには近くにいないかな…と辺りを見回したりした。

それでもいなくて、「皆で乗れば怖さは分けられる」とか訳の分らないことを言う里美に呆れ半分。

「いや、ごめん。真面目に無理、付き合い悪いとか思われてもいいから」

「付き合い悪いとかそういう問題じゃない」

少し考えたのち、目に着いたのは…

「あれならイケるかも…」

目に映るのはタコ。

手足の部分に乗るところがあるタコ。

あんなようなのならたぶん乗れるだろうと、考えていた訳だが…

「いやあああああああああ！！」

予想以上に高くまで上がり、回り…

「無理いいいいいいいい！！！」

止めてほしいと言わんばかりに叫んだ。

怖いものは乗っているのが凄く長く感じるものだった。

「タコ…無理…」

これが無理だったら他のものは絶対無理に違いない。

暫く、色々な乗り物に乗り、トイレに入った。

修学旅行、いつも考えているのは『告白』のこと。

どうしたらいいか、つてずっとずっと悩んでる。

「ふう…」

一つ、息を吐いてトイレを出ると里美が凄い形相で駆け寄ってきた。

「夢乃！」

「な、何？」

「早く来て！」

言われるがままに、連れて行かれるがままにトイレを出ると、すぐそこに優斗の姿。

たぶん、里美が言いたいことは「優斗がいるよ、告白！」なんだと思うけれど、本当のところは分からない。

「え、う…ちょ…」

無理、という言葉の口には出せず、歩みを進めることは出来なかった。

だって優斗の周りには優斗と同じ班の人がいたから。

優斗は班長で、しかも結構のしっかり者だ。

だから今、なんて絶対に出来ない。

「あゝ行っちゃった」

「ご、ごめ…」

里美達はこんなにも協力しようとしてくれているのに、肝心の私がこんなじゃ駄目だと思う。

どうして私って肝心な時にウジウジしちゃうんだろう。

ほんと、駄目だよな…

美来にも、誰かにも『もっとポジティブになった方がいい』って言われたけれど、やっぱり駄目なんだ。

どうしても、私は、駄目な人間なんだ…

29話：恋おみくじ

午後、急いでバスに戻りバス内で制服に着替える。

午前中は遊んでいたためにジャージだったのだ。

あとに男子が待っていると分かっている、どうしてもたついてしまふ。

おまけに：「虫がいる」ときたもんだ。

私は絶叫系も虫も嫌い。

しかも近くにいるなんて聞いたら着替えが進む訳がない。

その頃から私の気持ちは不安定だったのかもしれない。

実行委員長として仕事をやり遂げていないこと、優斗への気持ちを伝えることが出来ないこと、里美達に迷惑かけていること…

でもそれも、我儘だっただけを知っていたから、そしてそれをどうしていいか分からなかったから…

バスに乗って目的地に着く。

必要なものを持って、写真撮影の場所に移り、探検別に分かれて整列した。

これも優斗の班と同じところ。

しかも並んだ時に優斗が隣に来るという。

道は狭く、前と同じように前後左右が密着状態。

だから、優斗が凄く近い。

鼓動が、聞こえる。

体験が早く始まると、皆黙々と作業に取り掛かる。

何にしようか、と悩む者や成り行きでやろうとする物。

どちらかというと私は後者だ。

成り行きで行うと作業は案外、早く終わり、周りにあった完成品を

見ることにした。

ガラスが綺麗に飾られ、様々な色をしていた。

色々見ていく中で、私は一つのものに目を止めた。

それはこことは全く関係のないもの。

『恋おみくじ』

100円のおくさい子供が言う『ガチャポン』というやつだ。

こんな物が当たるとは思っていない、でも100円だ。

ただの、運試しにしか過ぎない。

あとで、やってみよう。

皆の体験が終わり、里美も『恋おみくじ』を見つけたらしくやってみることにした。

ちよっと恥ずかしいから、里美に壁となってもらって…

出てきたカプセルを見ると『中吉』とかかかっていた。

相性の良い血液型は『A』か『B』優斗はB型だ。

おまじないとか占いとか、信じてはいない。

でも、少し力を借りるくらいはいいよね？

『告白する時、これを握り締めておこう』

30話：玉碎

修学旅行2日目の夜

お風呂からあがって、彩音にヘアピンを預けたことを思い出し、髪を乾かしてから部屋を出た。

でも彩音は部屋にいないく、道端にいた先生に「彩音どの方向に行つたか知りませんか？」と聞いた。

ある人は男子の方だというし、先生は売店の方だという。

でも売店に行くための階段の前にいる先生の言葉だから間違いはないだろう、と階段を下り、売店に向かった。

そこには先生の言葉通り、彩音の姿があった。

「彩音、ピン忘れてた」

「あ、そうだね」

そうは言うが部屋に戻る気配はなく、その場に立っている。

「これから男子の部屋に行くの、夢乃も行こう」

そう言われ、ついて行く。

別に告白しなさい、と言われていている訳じゃないし。
が…

「さあ、夢乃。告白するの？しないの？」

まだ心の準備は出来ていなかった。

まずは彩音にピンを返してもらってから心の準備をして、それから
思っていたけど。

それでも…

「…します」

協力してくれた皆に応えるために…

「じゃあ、呼ぶよ？」

「うん…」

優斗の部屋へ彩音は入っていく。

遂に、私は言ってしまうんだ…

駄目だったら、どうしよう…今はそれしか思い浮かばない。

「沢本、ちよつといい？」

「ダメ、今忙しい」

そう言つて優斗は隣の部屋へ入つて…戻ってきた。

何がしたいんだか、そしてどうしてこんな人を私は好きになつてしまったのだろう、そんな疑問が出てくる。

「少しでいいから」

彩音の必死の説得により、15秒という短い時間が与えられた。

「す…」

タイミングが良く分らず、もう「好きです」と言おうとしたところで彩音に「はい、よいスタート！」と背中を突き飛ばされた。少し戸惑い、それでもせっかく彩音が作ってくれた時間を無駄にはしない。

「好きです…」

たったの、この4文字に想いを込めた。

こんな短い言葉で気持ちが伝わるなんて思つてはいない。

ましてや、鈍感な優斗なんかには…

それでも、これが精一杯だった。

「あーうん」

そう言つて優斗は軽く受け流し、ドアを閉めようとする。

「待つて、ごめん…真面目になんだけど…」

顔なんてまともに見れず、ずっと俯いたまま、優斗の返事を待つ。

「……」

流れる沈黙、間が持たなかった。

何か話さないといけない、そんな気がした。

「嫌なら嫌つて…無理なら無理だ、つてハッキリ言つてくれていいから…」

その方がスッキリするし、諦めもつく。

答えを考えてもらう、つていうのもあったけれど、そうすると返事

が返ってこないような気がしてならなかったから。

「あー…無理」

それが、優斗の気持ち。

「うん…」

パタン…と閉まったドア。

「岸本何やってんの？」

いつもの連の嫌味。^{いやみ}

何も変わらないのに、私だけが変わってる。

そのまま私はその場を走り去った。

自分の部屋まで一直線に…

「夢乃の部屋って“2005”だね？」

彩音にそう確認されて、小さく「…うん」と呟く。

自分でも分からなくらいに涙が出ない。

悲しいのに、泣けない。

それでも口元を押さえずにはいらなかった。

部屋に着くとドアを押し開け、ベッドに飛び込んだ。

最初から最後まで傍にいてくれた彩音がそつと私を抱き締める。

「頼ってよ、泣いていいんだよ？…せつかくここにいらっしゃるんだからさ」

その言葉に返していいものかは分からなかったけれど、でも今はこれしか言うことがない。

「…何か、予想通り過ぎて余計に涙が出ない」

こうなることは予想することが出来ていたことだ。

だから、泣けなかったのだと思う。

「里美達、呼んでこようか？」

彩音の問い掛けにも、満足に応じられない。

「……ん」

一瞬の間を置いて、彩音は私の頬に唇を落とした。

これには…驚いた。

31話：表裏

彩音が里美達を呼んで帰ってくるまで、時間がかかった気がした。でもそれはきつと勘違いだろう。時間が過ぎるのが早い気がする。

どれだけ不安な気持ちになっても、どれだけ現実を目に向けて受け入れても、涙が出ることはなかった。

同じ部屋の子に色々と聞かれたし、言われた。

その子は何も知らなかったから、そうするのは当然だと思う。

「夢乃は意外に乙女だね、あたしは好きな人とかいないから分らない」

女の子っぽい仕草しぐさもないし、言葉遣いいじはづかは男みたいに汚いから、乙女な訳ないのに。

この子も、彩音も私のことを乙女、なんて言う。そんなこと、全然ないのに。

何気なく、部屋のドア横にあるクローゼットにある制服に手を掛けた。

その瞬間に部屋のドアが開けられる。

「夢乃っ」

今まで見たことのない驚きの色を浮かべて、里美は私を見た。

その後ろには圭子もいる。

「大丈夫？」

「フラれちゃった…」

弱々しく微笑んだ。

もう、満面まんめんの笑みなんて出来ない。

「早く、班反省やる？」

気を紛らわせるためには他のことをするしかなかった。

しおりとシャープペンを取り出して、自己反省に記入する。

「夢乃、シャープペン貸して？」

今日の体験学習でシャープペンを無くした、という圭子に手渡しをする。が、

「あ、ちよつと待って」

圭子から再びシャープペンを受け取って、カチカチと押してみる。シャープの芯しんが入ってなかった。

芯を入れようとすると、手が震えて上手く入れることが出来なかった。

外見的には何も変わっていない、と思った。

でも心の動揺は地味に表面に表われているんだと、実感した。

「じゃ、会議に行ってくるね」

集合時間ギリギリ、慌あわてて部屋を出て小走りで会議場に向かう。

うねうねとうねった道を突き進んで、やっと着くと、同じクラスの班長そろうが全員、揃そろっていた。

「ごめんなさい、遅れました」

「いいよ」

優しく応えてくれた先生に安心して、席に着こうとする。

最後に来た訳だから、必然的に私の席は空いている席になる。

その空いている席は……優斗ゆうとの隣、だった。

一瞬、ほんの一瞬だけ、躊躇ちゅうちうして足を止める。

でも、こんなところで我儘ワガママなんて言えないし、言いたくもない。

仕方なく着席すると、会議が始まった。

「じゃ、終わります」

会議中、優斗と話すことはなかった。

その代わり、一言だけつつこんだ。

冷静を装うことは出来たから、安心した。

「先生、フラれた」

少し前に先生にも少し相談したことから、一応言ってみることにした。

「あ、そういうことか。だから何かいつもと違うのか」

先生はいつもと違う、と気付いていたらしい。

私は私自身のことも分からないのに。

「なのに、今の席隣だったく気まずい」

色々、愚痴をこぼした。

先生はそれを「うんうん」と頷きながら聞いてくれた。

優斗に言いたいことはまだあった。

駄目だったとき、今まで通り、普通のクラスメイトとして接してほしいとか。

聞きたいこともあったんだ。

好きな子、いるの？とかさ……

言いたいことも言えず、聞きたいことも聞けず、私は最後まで逃げていたんだ。

15秒という、優斗から言われた制限時間。

それを私は真に受けて、出来るだけ早い時間で終わらせよう、と言いたいことも、聞きたいことも口にはしなかった。

もっと、気持ちを込めれば良かったのかな？

もっと、優斗と話していれば、仲良くなっていれば優斗に少しでも好感を持ってもらえたかな？

優斗は私が優斗のこと、好きだなんて思ってもいなかったんだろうね。

初め、真面目に受け止めてくれなかったもん。

言いたいこと言える日が来るかな？

聞きたいこと聞ける日が来るかな？

もし来たら、それはどんな日なのかな？

31話：表裏（後書き）

言いたいこと、聞きたいこと、いっぱいありました
でも聞けなかったんです
これ以上言ったら嫌われそうな気がして、凄く怖かったです。

32話：玉碎翌日

会議から帰って来て、ソファに里美が凄い格好で寝ていた。

「里美？」

呼びかけても動きもしないから、死んでしまっているように見えた。

「あ、夢乃…遅かったね」

「そんなところで寝ないでベッドに入りなよ」

「うん」

のそのそと里美がベッドへ向かう。

私は時間ギリギリまで反省をやっていたり、抜け殻ぬがらになっていたから歯磨きとか何もやっていない。

私は静かに洗面道具を持って、洗面所に入った。

今日は無駄に疲れた気がする。

告白なんて…そう思いたくなる。

私は今日、何を学んだのだろうか？

私は今日、何を手に入れたのだろうか？

私は今日、何か変わったのだろうか？

分からないんだ、何も。

私はもしかしたら、優斗を困らせたのではないのだろうか？

返事を急がせたのは、優斗を困らせたのではないのだろうか？

私は、優斗に迷惑、だと思われたんじゃないのだろうか？

色々と考えながら、洗面所を出る。

消灯時間が過ぎているため、真っ暗な部屋を寢室の小さな明かりを頼りに進んでいった。

やること、全てを終わらせて私もベッドに入る。

両隣はもう既に眠っている。

里美が目印として点けておいてくれた明かりを消す。
そうしたのが約22時15分。

それから目を瞑るも、全然眠れない。

ずっと、さつきから同じことを考えているからだろうか？

よくよく考えると、恥ずかしいことしたな……って堂々巡りしている。
脳を使っているから、眠れないのだろうか？

何度も何度も寝返りを打って、それを振り払おうとした。
忘れたかった、私のしたことなんて。

これで私は完璧に優斗に嫌われたんだ……悲しかった。

あれだけ、優斗にだけは嫌われたくない、って言っていたのにどう
して言ってしまったのだろう。

答えてくれた言葉を思い出すと、悲しい。

でも、悲しいのに涙は出ない。

（今、何時だろう？）

ふと疑問に思い、デジタル時計が見えるようにベッドから身を乗り
出す。

12時3分、と表示されていた。

あれから眠れずに約2時間経っていたのか、とベッドに戻る。

眠れない間に両隣で順に寝返りを打って、ガサゴソ動く。

これは少し、怖かったりする。

いくら眠ろう、と目を瞑っても、考えることを止めよう、と寝返り
を打っても眠れない。

それから、気付けば朝だった。

あれから30分くらいした後に眠ったのだろうか。

でも起床時刻の10分くらい前に目が覚めた。

約寝たのは6時間。

いつもなら9時間、10時間くらい寝ているから全然足りない。
はあ…とひとつ、溜息をついて着替えようとする。

今日、優斗とあったらどんな顔をしていればいいのだろうか？

「おはようございまーす」

暫くすると目覚ましひびきが鳴って、皆が起きる。

そして、そこに彩音が健康調査に来たのだ。

「熱は？」

「ない」

里美と二人で彩音の質問に答えていく。

「良く寝た？」

「寝た」

里美はそう答えたが、私はそう答えることは出来なかった。

「夢乃は？」

「うーん、あんまり寝てない」

ずっと昨日のことが気になって眠ることなんて出来なかった。

眠れないのに加えて、今日は珍しく早く起きてしまった。

「ん、分かった」

何項目か確認すると彩音は部屋を出て行った。

今日はどうなるのだろうか。

自主研修の日、何事も起こらずに時は進むだろうか。

今日、優斗に会ったらそういう表情をすれば良いだろうか。

33話：やっぱり臆病者

朝、朝食会場へ向かうともう既に彩音や圭子がいた。私と里美は同じ部屋だったから時間は同じ。

朝は私が一番遅い、他の皆はもう部屋を出ている。

黙って昨日の夕食の時と同じ席に座る。

ふと、顔を上げると視線の席には優斗がいた。

優斗はいつもと何の代わりもなく、笑っていた。

あの時…私だけドキドキしていて、バカみたいだった。

本当に、優斗に私の想いは通じたのだろうか…

やっぱり、最後の最後まで遊びだとか、罰ゲームだとか思われていたのだろうか…

それが何だか悔しくて、虚^{むな}しくて、恥ずかしくて…

私なんか消えてしまいたい、と思う。

今まで優斗に嫌われたくないから、頑張ってきたことがあった。それはこれからは何を目標にやっていけばいいのだろうか？

次々と悩みが浮かんでくる。

例えば、優斗を好きでい続けるか、とか…

朝食後、部屋に戻ると退室準備をして私達はロビーに集まった。

班全員がいることを確認して、班員をバスへ移動させる。

私は退館式^{たいかんしき}があったからその場に残った。

バスに戻ろうとすると先生の「戻るまでに点呼^{てんこ}」と期待の声がかかった。

昨日、点呼が遅いからと皆に協力してほしい、とお願いしたのだ。

その効果が表れてくれればいいな、と思いながらバスに乗り込んだ。
「点呼ー！」

結構、大声で言った。

「うわっ、びっくりした」

「確認した？」

「したー、全員いるよ」

女子の確認を受けて、先生に報告する。

バスに乗り込むと、自然に優斗の方を見てしまう形になるから、極力見ないようにした。

今、目が合っちゃったら、どういう顔をしたらいいか、分からない。バス内で圭子と連絡し合うと、優斗が視界に入ってしまうから、顔を下げ気味にしていた。

こうはなりたくなかった。

なりたくなかったから、優斗に言おう、と思っていたのに私が逆に優斗を避けてしまっている。

どうして私はこんなにも、臆病なのだろう。

こんなじゃ、もし優斗が私を避ける気になくても私が避けているからああいこだ。

失恋したら髪を切る、そんなことを聞いたことがある気がして「髪を切ろうかな」と思っていた。

34話：ごめんなさい

3日目のホテルに着くと、荷物を一つの部屋にまとめて置いた。これから今日は丸一日の自主研修になる。

班行動になるから他の班と会うことなんて滅多にないだろう、自主研修の班には広いのだから…と安心していた。

行動前の持ち物点検、服装点検、親が言うにはこんなにも厳しいのは珍しいらしい。

塾で結構他校の学生とかを見るけれど、服装は結構乱れていたりする。

女子の場合はスカートが短いとか。

その分うちの学校は徹底しているんだなあ…と思ったりする。

出発前の集会的なものも終わり、出発。

階段を下りて、外にぞろぞろと皆が出ていく。

街に出れば、こんな人数比ではない、と思えば不安にもなる。

進行方向を地図で確認すると、信号で止まる形になった。

待っていると、周りにはまだ他の班がいる。

その中には優斗の班もいた。

自然と手に力が入る。

今、一番会いたくない人、と言えば大いに当てはまる。

怖くて怖くて堪らない、いつものように自信を持って立っていることが出来ない。

今の私には自信も何もない。

「やばっ、時間かなり遅れてる」

そう言っ、優斗の班と離れようとする。

時間が遅れていたのは事実だったし。

走っていこう、と徐々にスピードを上げていくと「待った」の声がかかった。

何だろう、と振り返ると圭子が老人夫婦に呼び止められていた。

「どうしたの？」

小さな声で里美に聞くと「分からない」と帰って来たので圭子と老人の話聞いてみると、道を尋ねられているようだった。私達だって旅行者なんだから聞かれたって困る。

そういうのって、服装とかで判断できないものなのかな。

時期とかから考えても分かりそうなことだと思う。

イライラする…

進行方向を見ると、優斗の班が歩いて行くのが見えた。

嫌、行かないでほしい…

せめて、振り向いてくれないかな…と思ってしまっ。

フラれたのに、彼女じゃないのに、そう思う。

まだ、好きなんだ。

まだ、優斗が好き。

でもそれは言葉にはならないし、伝えることも出来ない。

未練がましい、って自分でも思ってる。

諦めたい、でも優斗が好き。

辻褄つじつまの合わない気持ちに戸惑って、イライラして、自分が嫌になる。

「服装とかで地元の人じゃないって、分からないものかな？」

走りながら、不満を漏らす。

「ってか、ここどこ？」

道は分からないし、時間はないのに呼び止められるし、気持ちは不安定でもう、嫌…

自分なんて、消えてしまえばいい。

どうして、私なんて存在するのだろう。

全て、我儘だワガママって知ってる。

分かってて、操縦コントロール出来ていないのはもっと、腹立たしい。

「ねえこれ道、違うんじゃない？」

「知らない、地図見ても、分からない」

無責任だって、知ってるよ。

どうしてこんな奴が…って思っているよ。

去年の宿泊研修でもこうだった。

何かがあって、私はイライラして、班の雰囲気悪くした。
今年はこんなことにならないように、って思っていたのに。

でも、駄目だった。

こんな私には班長なんて、実行委員長なんて務まらなかった。
いつもいつも、班の雰囲気を悪くするだけの、無力な奴なんだ。

ごめんなさい

応援してくれたのに

ごめんなさい

協力してくれたのに

ごめんなさい

ごめんなさい

ごめんなさい

34話・ごめんなさい（後書き）

これに関わった友達へ

どうしても、言葉に出来ないからこの場を借りました

あの時は本当にごめんなさい

頼りなくて、自己中で我儘で…

本当にごめんなさい

35話：繰り返し（前書き）

少し話が戻ってる感があります

35話：繰り返し

初めのうちは雰囲気が悪くて、私が悪くしてしまつて、でもチェックポイントに着くぐらいにまでは元に戻っていた。

でも、嫌な気持ちは変わらない。

罪悪感が残った。

どうして私は雰囲気を悪くすることしか出来ないのだろう。

不思議と、昨日のことは引きずってはいなかった。

何とも思わなかった訳じゃない。

ただ、予想通り過ぎて、呆れただけだ。

でも、何か枷^{かせ}になつていたのかもしれない。

明らかに平常心ではいられなかった。

今の自分の肩書きとそれに見合う行動。

全てにビクついていた。

チェックポイントでの用事が終わり、私達は街中に戻った。

移動中にこれからの行動を確認し、時間に初め、誤差が生じたため、立て直す。

一つだけ、遠い所に行く予定があつたから、それを削った。

その次に予定だった買い物をすることにした。

里美も行きたい、って言つていた場所。

お土産も買つてなかったから、買えたらここでいいな、と考えていた。

少し、若い人向けの階で何があるのか、と店内を回っているとクラスメイトの男子に会った。

幸い、優斗の班ではなかったからほつとした。

嶋野^{しまの}の班だった。

「岸倉、何買うんだ？」

「シユシユとネックレスだけど？」

男っばい、とか思われている私だけど、気にすることは気にするし、最近は何日の服装とかにも気にかけている。

意外、とか思われたかな？

「ふーん、彼氏に？」

彼氏に、っていうのはネックレスのことだと思う。

私に彼氏なんていないのに。

「いないよ、昨日告白してフラれたし」

「え！？ 誰に？」

そんなに驚くことだろうか？

「優斗…」

「あ、あいつはやめたほうがいい」

「何で？」

驚く言葉だった。

嶋野は優斗と仲が良かったから、止めた方がいいとは言わないと思っていた。

「何でも」

「仲良いんじゃないの？」

「仲は良いけど、1週間一緒にいたら喧嘩する」

そういうものなのだろうか。

私はそうは思わなかった。

優斗はやる時はやる人だと思う。

この修学旅行の班では班長だし、部活では部長だ。だから、責任感はある人だと思う。

でもそれは仮初めの姿なのかな？

友達の前では「自分」でいる。

だから、私が知っている「優斗」は本当の「優斗」じゃないのかな。

でも、嶋野にそんなの認められようが、何だろうが、どうでもいい。だって、優斗が批判されたところで何も変わらないのだから。

私が優斗を好きってことも、私が優斗に告白した、ってことも、私が優斗にフラれた、ってことも。

何も、変わらない。

全て、元には戻らないのだ。

楽しかった優斗との会話はただの過去で。

優斗に告白した、ってことも過去。

それで優斗が怖いのは「今」

こうなりたくなかったから、告白するのは怖かった。

でも、ほんの1%もない確率にかけて、私は行動した。

そうさせたのは、優斗の特別になりたかった一心で。

その時は何も考えていなかったの。

ただ、優斗に認めてほしかった。

身の程知らずの恋はもうしない、って決めたのにね。

私は繰り返しているんだ。

36話：雨に打たれたい

彩音と里美が行きたい、と言っていたアニメ専門店のような場所に行き、用事を終え、外に出ようとすると、

何も知らずに外へ出ようとすると、頬を何かが打った。

「雨…」

知らぬ間に雨が降っていた。

ここに入る前には降っていなかった。

冷たい、雨……— これで全てを洗い流せたら、と思う。

次第に雨は強くなり、地図を見ながら…とはいかなくなってきた。まだ寄らなければならぬ所があったため、今、どこにいるのか、ということを確認しながら行動する必要があった。

知らない土地のため、覚える、ということも出来ない。

信号に捕まっては、近くの屋根の下に立ち、道の確認をする。

空はそんなに暗くないのに、雨は勢いは激しい。

止むのかな…この雨。

少し、不安になる。

雨は何もかもを流してくれそうだけど、涙を隠すには最適だけど、じめじめしていて、あまり好きじゃない。

でも、一度だけでいいから、雨に隠れて泣きたい。

雨に、体を打たれたい。

雨の中、地図を見ながら歩いていくとだんだんと雨が止んできた。さっきまでの激しさはどこへやら。

でもまだ、傘は必要だった。

傘を首で支えながら、目的地を探し、木々の中にそれを見つけた。

「なんか、シヨボ…」

木の中に埋もれる時計台。

もっと、大きいものだと思像していたけれど、それは大きく裏切られ、小さい時計が見えた。

写真を撮る、といってもこうも木が生い茂っては時計台がうまく納まらない。

先生に配られたカメラは使い切りカメラ、ズームとかは効かない。

それでも撮らなければいけない、と傘をがっちりと首で支え、ピントを合わせる。

「木、ジャマッ」

文句を言いながら、シャッターを押す。

上手く取れたか、も確認出来ないのが不便なところだ。

使い切り、だから性能は良くないのは知っているが…

信号を渡り、時計台の前まで行くと皆で並び写真を撮る。

辺りには傘を差していない人が多くいた、時刻は4時ちよつと過ぎ。このくらいの時間になるともう、帰宅する人とかが多いんだな、と思う。

田舎に住んでいる私にとってはほぼ有り得ないことだ。

と、人が多くなってきたため、道路沿いにあるしょぼい時計台を背^バ景^{ツグ}にして撮るには少しだけ、通行人の邪魔になっていた。

「もう戻ろつか」

何枚か写真を撮った後、雨もぽつぽつと治まってきた。

この分なら急がなくても集合時間には間に合いそうだが、時間があれば集合場所であるテレビ塔も見学できる。

そう考えて、少し早めに集合場所に向かうことにした。

37話：嫌いにはならないで

集合場所であるテレビ塔へ行くともう既に結構な人数が戻ってきていた。

集合時間にはまだ早く、余裕があり、戻るのが早すぎるのは駄目、と言っていた先生方も何も言っていない様子だった。

きつと、この雨でテレビ塔の下に避難することを許したのだろう。

戻ると先生に買ってきたものを見せる、という規則があった。

明らかに持ってきていい金額以上のものを買っていないか、というのを判断するためと

ゲームやマンガを買った場合、見たくなるから預かるため、というのもあるらしい。

私はゲームやマンガは買っていないが、ネックレスがあつたので先生に預けることになった。

クラス全員のものを見ていくと先生の傍らには買い物袋がいっぱいになった。

3クラスあるうちの中でうちのクラスが一番多い。

…と言っていると元気そうに思えるのだが、内心そうではなかった。もう既に優斗達の班は帰って来ていて、結構近くにいた。

暑いから、と学ランの上を脱いでワイシャツになつている姿がやっぱり、カッコいいと思えた。

諦めたくても、そういう一つ一つの何気ない仕草しぐさが目に入り、カッコいいと思う自分がいて、諦めきれしていない。

写真も里美を撮るなんて言いながら、背景バックに優斗が入る形にした。

自主研修が終わると野球観戦があり、ドームにバスで移動した。皆の前では明るく振る舞っているつもりだ。

ドームに入ると班ごとに座る席が決められていて、座ると嶋野が隣だった。

嶋野は告白したこともフラれたことも自主研修の時に知ったから色々聞いてきた。

「フラれてもまだ好きなのわけ？」

そう聞かれた時、少し言葉に困った。

自分でもよく分からないから、未練がましいのは嫌だから、諦めたいと思っているから。

「分からない、でも諦めたいと思ってる……」

それだけは事実だった、もしかしたらまだ好きかもしれない、でも諦めたいと思ってる。

無茶苦茶な考えだってことは分かっている……そう思うしかない。

いつまで優斗を好きでいたって、何も変わらないし、ただ優斗に迷惑になるだけ。

これ以上、嫌われたくはない。

好きになんてならなくていい、ただ普通のクラスメイトとしていただけなの。

好きになんてならなくていい、ただ嫌いにはならないでほしいの。普通のクラスメイトとしているには嫌いになられてしまっただけは終わってしまうの。

少し前の方に優斗の姿があった。

隣の女子と楽しそうに笑っている。

少しだけモヤッとしたものが私の中に広がる。

こんな気持ち、いつになったら感じなくなるかな。

38話：三次元、二次元

次の日、修学旅行最終日。

ホテルを後にして、科学館でプラネタリウムを見ることになった。た。

前日、寝るのが遅く、寝坊したがまだ、眠気が残っていた。

必死に寝まいと思っていたが、暗い中で寝るな、と言う方が無理な話だ。

だんだんと意識が遠退いていった…

気付くとプラネタリウムは終わっていて、20分ほどの館内見学へ移った。

各々、班単位で散らばっていき、自由に見学していた。

近くに優斗の班がいたが、真反対の方向へ進んで行ったので少しほっとした。

すぐに見学時間は終了して、外に集まった。

私達の住んでいる田舎とは比べられないほどまで気温が上がる地域。それに加え、大荷物を抱えながら駅まで歩くのは辛い。

じりじりと太陽が地面を照らし、それが反射して私達に当たる。

もちろん、直射日光もある。

時間がなかったからって日焼け止めを塗らない、なんて考えるんじゃない。

いつからそう考えるようになったのだろう。

今までオシヤレとか全然興味無かった。

肌の手入れなんてしなかった。

多少、平均より体重が重くたって、気にしなかった。

でもそれを気にするようになったのはいつからだろう？

きつと、優斗を好きになった時からだ。

三次元だと、見た目を気にしてしまう。

でも二次元だと気にしなくて良かった。

だって、会えないから。

言葉を交わせないから。

でも三次元になると、全て逆転する。

それが唯一の私が優斗を好き、って証明できるものだったのかもしれない。

何て優柔不断な、って思ったこともある。

本当に好きなのか、って自身に問いかけたこともある。

初めは自信なかった。

何か気になるかな、って感じだったから。

でも何気なく見ていたら、どんどん気になってしまった。

家も近いから、何か嬉しく思えた。

気になって、窓の外を見たりしてきつとあそこの部屋なんだろうな、なんてストーリーカー紛いなこともしていた。

軽蔑してくれてもいい。

だってこんなこと、もう知られようが何であろうが意味をなさないから。

全て終わった。

39話：過去の自分と未来の優斗に“さよなら”

修学旅行から帰ってくると、全てが終わった感じがした。
実行委員長という座からも降りられる。

この解散式と解団式を終わらせれば…

もう、忘れられればいいと思った。

でも優斗に目が行ってしまう、今までと何も変わらない優斗に目が行く。

少しでも気にかけてくれるかな、なんてほんの少しだけ思った。
だけど、そんなはずもない。

優斗の性格なんて、分かってる。

超が付くほどの鈍感で、失礼な奴だ、って…

修学旅行が終わり、諦めようと努力するも、優斗の笑みを見ると崩れてしまう。

あの笑顔が好き、普通に笑っていても私にとっては意地悪に笑っているようにしか見えなくて。

あの意地悪な笑みが私に向けられていたらどんなに幸せでドキドキするんだろう、って思ってた。

優斗と身長に近い里美が体育大会の練習でバトンを渡されているのを知ったら、いいな、って思ってた。

面倒くさがりな優斗がヤル気を出している、なんて聞いたら、私の知らない優斗がいて、諦めるに諦められなくなって。

気になってしまう。

まだ、優斗が好きだ。

それは里美達に優斗の話題が出されるまでは、変わらないと思う。
それを聞かされると、諦めるに諦められなくなるから。

それほどに私の決意は脆くて、優斗が頭から離れない。
好きだ、本当に好き。

でも、諦めなければならぬ。
それは分かっているから…

だから、言わないで。

優斗のこと、聞きたいけれど、聞きたくない。

優斗の声、聞きたいけれど、聞くと諦めきれなくなる。

だから、私から優斗が消えるようにしたい。

これからが怖い。

これから、色々な行事がある。

体育大会に、学校祭。

どれも直接的に関わらなくても、何か関わることはあると思う。

いつまでも失恋を引き摺^ずる訳にはいけないから、優斗を避け続ける
にはいかないから。

だから、時間をください。

いつか優斗に何も思わなくなる日が来るまで…

優斗を避けずにいられる日まで…

いつになるか分からないけれど。

いつかそうなると信じているから。

いつかそうなるその日まで、努力をする。

いつかそうなるその日まで、私は優斗を好きでいる。

極力、その期間は短くなるように…

そうだった日には、心の中で優斗に“さよなら”を言っよ。

今は過去の自分に“さよなら”だ。

39話：過去の自分と未来の優斗に“さよなら”（後書き）

淒く中途半端で完結です

色々と重複している場面や意味の分からなかった場面が多かったと思います

それでも今まで読んで下さった皆様、本当に有り難う御座いました
これからは色々、短編などを書いていく予定です
そちらの方もどうぞ宜しくお願いします

本当に今までどうも有り難う御座いました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482g/>

三次元に恋をした

2010年10月14日16時33分発行